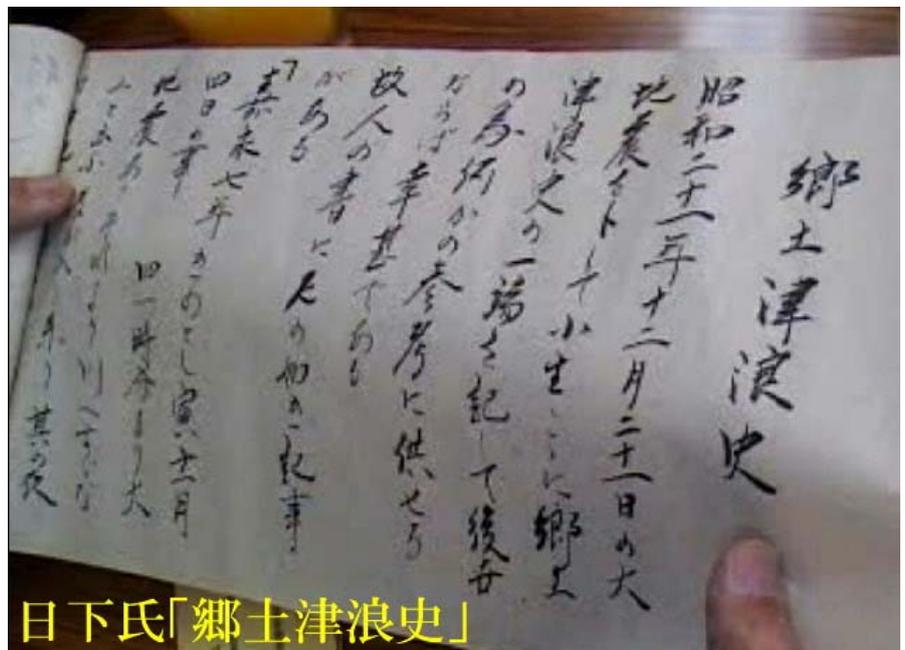


印南に残る過去南海地震・津波の記録

- 宝永 ①印定寺 合同位牌裏書き
②津波溺死者合同墓碑記録
- 安政 ①森家文書
②東光寺過去帳記録
③本郷かめや(古川薬局)倉庫板壁の記録
④片山宇一郎家(地方)津波・物価記録
⑤最勝寺記録(山口)
⑥玉置善右衛門記録(地方)
⑦桶屋與兵衛(よへえ)の息子戎(えびす)屋楠次郎(12才)記(地方塩田家蔵)
- 昭和 ①印南町史通史編に詳細記録
②昭和21年津波覚書「横島に流されて」小川キミエ(本郷)
③郷土津浪史 日下善右衛門(浜東)
④印定寺 震災横死者之靈位裏書き



【宝永の記録】

印定寺合同位牌裏書き

ああ、時は宝永4年10月4日の昼1時頃、大地震^{おおじしん}が数回起こり、山が崩れ、地面は砕け、人々はみな大混乱した。

午後2時頃に、山のような津波がうねりながら押し寄せてきて家財があつという間に流されて、行方知れずになってしまった。前代未聞^{ぜんだいみもん}のことだ。ことごとく波にさらわれ皆漂^{ただよ}い溺^{おぼ}れてしまった。哀^{かな}しいことに親子兄弟はあつという間に離ればなれになってしまった。およそ162人の老若男女^{ろうにやくなんによ}が流され亡くなり、水の泡と消えて、和歌の浦の波のように帰らぬ昔となってしまったのだ。

近くで見た人も遠くで聞いた人も、たいへん哀^{あわ}れに思ったのである。

13回忌に当たる享保^{きやうほう}4年10月4日 印定寺八代天誉忍然^{てんよにんねん}がここに記す。

【安政の記録】

◎森家文書

1月5日午後4時頃より大地震があつて人々は驚いているうちに、西の方に天まで響く大きな音がするやいなや引き潮^{しお}なしに津波が上がってきて、何度も満ち引きがあつた。日暮れ時分に湾の半分が干上がったあとに大波が来た。ただし波の高さは札場の辻で3尺(1mほど)、恵比寿神社階段で2段と少し。印定寺の門柱^{もんちゆう}で1尺2寸(40cmほど)あつた。波は椎之木^{しのき}(今の印南中あたり)にまで達した。浜側は家が少々流失し、大破した家が多かつた。印南川の両側の家は残らず流失したが、印南橋の本郷側南詰めに破損^{はそん}の家が1軒残つた。また回旋磯場漁船^{かいせんいそば}が流失したり破損^{すうそう}した舟が数艘あつたが、流死者は一人もいなかった。みな山上^{さんじよう}に逃げ上り命が助かつたのである。今年6月の夜明け頃地震に驚き、これは津波が来ると誰かが言いだしたので、その頃に宝永4年の10月4日の津波に流死者が多数あつたと紙に書かれていたが、印定寺石碑に同じ事が書かれていることを見つけだし心の準備をした。これも氏神^{うじがみ}のお

かげである。他の所に舟で出た者も怪我や災難はなかった。大地震があればすぐに津波が来るといつも心得ていて、高いところに逃げ去ることが大事である。しかも晴れて海に異変がなく波も高くななくても、大水が出て川の堤防が切れるときのように津波は上がってくる。印南湾に羽網場の舟がつながれていたが、引き潮の時に破船し湾の西に舟が少々残った。

以上、後の世に大地震が来たときも人々の命が助かる事を願って短文だが書き残しておく。

◎東光寺過去帳記録（過去帳余白に記された記録）

嘉永七年（安政元年）6月14日に珍しく大地震があった。夜中の1時頃から朝方まで3、4度ゆった。驚いた。汐の引きも近頃珍しい引き方をした。津波が来るといわれたら、このあたりの人々は身一つで逃げ去る心得をしている。同年11月4日朝の10時頃に大地震がゆった。汐は珍しい引き方をした。翌5日午後4時頃に大地震がゆって間もなく大津波が来た。人々は西へ東へ北へ南へと思い思いに逃げていった。その声は骨身にとおるほどだった。言うも愚か、語るも涙なことであった。命惜しさに山を住み家とした。人々はしばらくその日暮らしをした。

【昭和の記録】

◎昭和21年津波覚書「横島に流されて」 小川キミエ 本郷

地震後夫は浜に出た。私も津波のしらせを受け4歳の男の子を背負い、小学校6年生の女の子の手を引いた。しかしまたたく間に家は倒され、親子3人家がもろ共に川に浮かぶことになった。流された家の柱を片手に抱えたから命が助かったが、この間印南川の口を何回も津波と共に往復した。やがて横島まで流された。その間海面は家具や酒樽等が流れて身の危険にさらされたが、運よく3時間後、鳥賑漁に来ていた浜部落の中西吉太郎さんに助け上げられた。その時片手に抱いた長女は既に死亡していたが背中の中男は無事であった。やがて地方部落の坂口辰之助さんの鳥賊釣船に移され、午前8時に浜に上った。漂流中は一心に神仏

に祈りつづけた。夫は浜よりの帰途、附近の柿の木につかまり一命を拾ったが祖母は避難途中で死亡した。

◎郷土津浪史 日下善右衛門 浜東

昭和21年12月21日の大地震のようすを描いて、私はここに郷土津浪史の一端を書き残す。後世のため何らかの参考にしていただければ幸である。

—中 略—

昭和21年12月21日午前4時19分、左右動の大地震、素足寝巻で飛び出し、瓦の落下等を防ぎながら、落ち着いてしばらくして家に入った。まずあかりを灯して足を洗い服をきて少しあと、その間約12、3分、突然川方面より津波の大声に倉に米を出しに行き表に行った時、流速約13メートル毎秒(時速約50km)の波が浜より入ってきた。その時すでに邦子(妹)と武次(弟)が飛び出していた。すぐに米を投げ捨てて裏より出た時、祖父、父、姉と私と母の順にたがいに手を取り合っていた。祖母が裏より武次らと同方面に行った。森定の所へ来たとき腰までずぶ濡れで、また浜よりの波が強く歩けず、祖父の号令と共に引き返し増田さんの2階へ上がり、約3分ほどで水が引いたので、私は彼ら3人を探すために石橋さんの家のあたりへ来た。その間、流れ込んできた物が道をふさいでいて、それを回り、あるいはころびしながら行ったが誰も見つけることができなかった。しかたなく家へ帰り服を着がえ、すぐ要害山へ行けばたくさんの方がたき火をしていてその中に祖母と武次を発見したが、邦子は見あたらなかった。聞けば我慢できず逃げ出したようだが、邦子の行方は全く不明であった。

—後 略—

その後邦子さんは地方の路地裏で死体になって発見されました。約50cmほどの津波に足を取られ流されて溺れたようです。